

# 四人の医師の物語

戸田吉信

「四人の医師の物語」と題して本日私が語ってみようと思うのは、『ボヴァリー夫人』についてであります。と申しましても、『ボヴァリー夫人』がすなわち、四人の医師の物語だということではありません。そうではなく、この小説には医師が四人登場し（もぐりで医者めいたことをしている薬剤師のオメーはいま除きます）、そのそれぞれについては、すでに十分語られ、あるいはまだ語りつくされていない部分もあるかと思われませんが、これらを全体的に関連させ俯瞰してみますと、この小説を書いた作者のある精神的姿勢のようなものが浮かびあがってくるのではないかと、いう意味なのであります。それはひとつは、フロイトのいわゆる「家族の物語」に、いまひとつは、これは本日の話題ではありませんが、これらの医者かいずれも田舎医者であるところから、フロベールにおける田舎（Campagne および Province）のテーマに収斂していくものだと思います。後者については、バルザックの強い影響を見なければなりません。

—

というわけで、四人の医師。作品の中でえらい順に申しますと、まずエンマの死にぎわに呼ばれるラリヴィエール博士（Docteur Larivière）。これはフロベール自身の父、アシル＝クレオファスを描いたとされています。次にシャルルが叛れ足のイポリットの手術に失敗したときに登場する、カニヴェ博士（Docteur Canivet）。次いで主人公のシャルル・ボヴァリー。最後に、これはあまり言及されることはなく、作品の中で医者としての活躍は皆無なのですが、シャルルの父もまた、鹹になったとはいえナポレオン軍の元軍医補（ancien aide-chirurgien-major）なのです。

ついでに言うておきますと、主人公のシャルル・ボヴァリーは医者と言っても、博士号をもった医師より資格的には一段下の、免許医（officier de santé）というものでした。

これは1892年までであった制度で、Lycée または Collège の troisième と言いますから、昔の日本の旧制中学四年、現在の高校一年終了の免状を持ち、十七歳になっていけば、バカロレアに合格しなくても医学部に入学する資格のあるものです。ただし、一般の医学部の課程よりも修業年限は一年短くて三年間、学費も通常のコースよ

り安いということです。それに免状を習得した県以外では開業することができず、大きな手術をおこなうときには、医学博士である外科医の陪席が義務づけられていました。要するに、シャルルは医者といっても、一ランク下に位置づけられる存在なのです。作品の中で、シャルルが特に受験勉強をして、大学にはいったように思えないのは、このためなのです。

作品の中には医者への匂いが芬々としていますが、フロベールの家系もまた医者の世界と切り離すことはできません。

フロベールの父方の家系は、シャンパーニュ地方ノジャン＝シュル＝セーヌ近郊の出身で、シル＝アンリーによりますと (*L' Histoire du monde c' est une farce, ou la vie de Gustave Flaubert*, Édition Ch. Corlet, 1980), 『感情教育』において主人公フレデリック・モローの故郷に設定されるノジャン＝シュル＝セーヌを中心にして、バヌー、サン＝ジュスト、メジエール＝ラ＝グランド・パロワスといった近郊の村々には、十六世紀以降、数多くのフロベール姓が認められるとのことなのです。

一族のもっとも古い先祖と確認されるのは、1605年頃生まれたテオドールという人物で、この人は cultivateur ということですから、ふつうの農民より幾分豊かな感じかいたします。その息子のミシェルが、maréchal-ferrant といいますから、馬の蹄に金具を打つ蹄鉄業のようなことを始めたのです。その息子のミシェルもまた同じ。父子ミシェルいずれも子供を数人ずつもうけ、家系の輪が広がっていきます。

さらにその息子、ギュスターヴの曾祖父であるジャン＝バチスト・レーネの時代になると、一族の基盤はいよいよ強固になり、その根はより深く固まってきたと言います。というのは、このジャン＝バチストという人物は、たんなる maréchal でなく、maréchal-expert と呼ばれるようになったからであります。「エキスパートの蹄鉄屋」とはなんのでしょうか？ 蹄鉄という仕事は十字軍以来のものですが、戦争だけでなく、輸送・運搬・交通などの手段として馬が多用されるようになると、その需要は増大してくるのですが、たんに蹄に鉄を打つだけでなく、蹄が傷ついていればこれに手当をしてやるといったことも、当然おこなわれるようになりました。エキスパートという意味は、そうした馬の怪我や病気の専門家ということで、言わば獣医のようなものだったのです。その対象がたんに馬だけでなく、他の家畜に及んだのも当然でしょう。こうして、ジャン＝バチストは、あちこちの村からお呼びがかかるようになったのです。

彼が名望家であった証拠に、その息子でギュスターヴの祖父になるニコラは結婚相手に恵まれます。彼の義父となる人は、lieutenant en la prévôté de justice de Poussé、かつ、maître-chirurgien だったと言いますから、「裁判所の警備隊の隊長」で「外科医の親方」を兼ねていたのでしょうか。このほかにも、いろいろな肩書きをもっている人物のようでした。

後で申しますが、十八世紀後半は、衛生学、外科学、解剖学、精神医学といったさまざまな医学の分野が、めざましく活気を帯び、脚光を浴びた時代でした。獣医に関する部門もその例外ではありません。1767年、パリの南、アルフォールに獣医学校が創設されます。リヨン、トゥールーズにおいても同様です。そして、先のジャン＝バチスト、その息子のニコラ、アントワーヌはいずれも、ここで獣医学を正式に学び、免状を取得することになります。

私事で恐縮ですが、一年少し前に、生後半年ばかりの子犬が首に鎖をつけたまま、おそらくは捨てられたのでしょう、わが家に舞いこんで来ました。ふたりの子供を送り出した無聊に、つい甘い顔をしてやったのか運のつき、すっかりわが蓬屋が喧にいつて、いつてしまいました。「トン助」と名をつけました。チョコレートとビスケットとアイスクリームが大好きで、威勢よくワンワン吠えるものの、ノラ猫に飛びかかるとキャンと悲鳴をあげるのは、わが「トン助」のほうなので、お前はそれでも犬かと言いたくなるのですが、昨日、「トン助君」という宛名で葉書が来ました。蚊に食われる季節なので予防注射をという、獣医さんからの案内なのです。昔の犬は蚊に食われたくらいで病気にはならなかったぞと、私は唖いてみるのですが。現在、ペットが愛好され、そのせいか獣医さんも結構繁盛しているようです。

十八世紀の獣医というのは、そんな小綺麗なものではありませんでした。家畜が病気になる、牛や豚が仔を産んだ、乳が出なくなったといっではかけつけ、泥や藁屑の中で汗にまみれて奮闘する、さしずめ、いまの学生に人気のない3kの代表のような仕事で、階層としては農民と紙一重のところに位置していたというのが実情でしょう。敬虔に神を信じ、王を敬い、土と伝統の中に生きる。フランス革命の渦中に見るフロベール族はそのようなものでした。ジャン＝バチストの妻エレヌが、革命政府によって課された「理性の神」を崇めず、以前どおりに教会に通っているといって何度も糾弾されたのを、夫のジャン＝バチストが懸命に弁護したことを、シル＝アンリーは語っています。息子のニコラは、さらに強硬的な王党主義者でした。その主張と行動ゆえに彼は逮捕され、投獄され、流刑の判決を受けたのですが、危ういところでテルミドールのクーデタが起り、助かったということです。

そのニコラが、1799年、オーブ県の副知事宛てに書状をしたためています。いわく、自分の息子のアシル＝クレオファスは理科系の科目にすぐれた才を発揮しており、将来都会で勉強させてやりたいが、自分には金がないので、ひとつ県の派遣学生にしたいだけまいかというものです。いまで言えば、県の奨学金をよろしくということなのです。革命の間は王党派として活躍し、家業を疎かにしたのですから、お金もなくなったのでしょう。

アシル＝クレオファス、1784年11月14日生まれ、ギュスターヴの父となる人です。ともかく、この副知事宛の書信は功を奏し、オーブ県派遣学生として、一族で初めて彼はパリの土を踏み、パリ大学医学部で勉強することになります。彼の師は病理解剖

学の基礎を築いた人として高名な、デュピュイトラン博士です。この人はパリ市立病院外科部長、後にルイ十八世およびシャルル十世の侍医になり、医学者として、文字通り最高の峰を極めた人でした。もっとも、彼はアシル＝クレオファスより七歳年長にすぎず、このためでもあるのでしょうか、後輩であり弟子であるフロベールの父の才能を妬んで、地方に追いやったという説が根強くあることも事実です。

ともかく、1806年、勅令によってルーアンに解剖学の学校が創設され、アシル＝クレオファスはそこに赴任することになります。責任者はルーアン市立病院の外科部長であるローモニエ博士という人物で、彼はこの人のもとでさらに研鑽を重ねることになります。1810年、パリ大学で博士号取得。ローモニエ博士の所には、博士の友人であるノルマンディーの医師の娘で、幼くして父母に死に分かれたカロリーヌという女性か引き取られていて、アシル＝クレオファスは1812年2月10日、この娘と結婚することになります。それ以後は順風満帆というか、1815年、ローモニエ博士が引退してからは、翌年博士の後継者として市立病院外科部長（事実上の院長）の職につき、以後46年に病没するまで、ルーアンの人々に畏敬の念をもって慕われ、多くの弟子を抱えた名医、裕福な中産階級のブルジョワのひとりとして、幸福な生活を送ることになります。

ギュスターヴの父に関しては、いま三つのことを言っておきたいと思います。

第一は、アルト版文学史第十三巻の著者であるマックス・ミルネール教授の指摘にあるように、田舎の獣医だった家系（世代をふるごとに勢力を増していったのは前に見たとおりですが）から、人口十万という、当時としては大都市であるルーアンの市立病院の事実上の院長におさまるということは、前世紀においてはほとんど考えられなかった社会的昇進であるということです。逆に言えば、十九世紀初頭の、ナポレオン帝政と王政復古の時代には、まがりなりにもそうした昇進が可能になっていたということでもあります。もちろん、本人の営々たる努力と、たとえばよき結婚といった幸運にめぐまれた場合と、ミルネール教授はつけ加えています。

アシル＝クレオファスはそのような昇進を地で行った、悪く言えば成り上りのブルジョワの典型でした。彼は自分の幸運に感謝したか、それとも自分の才と努力を誇らしく思ったか、そのあたりはわかりませんが、おそらくその両方でしょうが、とにかく、彼は自分を受け入れてくれた階層のイデオロギーと習慣に順応し、これと同化することを信条として生きてように思われます。フランス革命とナポレオン戦争のさなかに青春時代を送った彼は、若いときは時代の子として、むしろ自由主義的な思想の持ち主だったのですが、一家をなしてから彼の彼は、そのような若年の夢はさりと捨て、なんのわだかまりもなく、中層ブルジョワジーの生活にどっぷりとつかっていくことになります。

市立病院の外科部長として生活が安定すると、彼がまず手をつけたのはルーアン近郊から始めて、ノルマンディーのあちこちに地所を買いもつとめることでした。一生働

いてやっとならずかな土地を手に入れる、現代日本のサラリーマンのようなちやちやなものではありません。領地と言うのがふさわしい、堂々たる地所です。土地に根を降ろした貴族に取って代わろうとする当時のブルジョワ階層の力強さと、その精神傾向を見る思いがします。ふたりの息子の教育としては、実学一辺倒。八歳年上の兄アシルは医学の道をまっしぐらに進み、早くから父の後継者と目されています。兄とちがって、実学になんの興味もしめさない弟のギュスターヴのほうは、法律を勉強させられることになります。これといった才能をしめさぬ男の子には法律をやらせ、できれば法曹界に進ませたい、少なくともその知識を何かのうちに一族に役立てたい、これが当時のブルジョワジーの教育イデオロギーでした。「法律をやる」faire ses droitsという言葉は、この時代の慣用句でした。アシル＝クレオファスにとって、息子が実学以外のものをやるなど、思いもよらぬことでした。気鋭の青年科学者の無神論的傾向もいまいずこ、生活の主たる行事が宗教によって律されているのは、それがキリスト教が息を吹き返した時代の流れであり、また人々の心性でもあったからでしょう。

次に、時代もまた外科学・解剖学にとって有利であったことも、言っておかねばなりません。ナポレオンは医学を学ぶ学生に学費免除の措置をとりました。これは彼のおこなった戦争、と言うより、当時フランスが置かれていた状況では、多くの医者を必要としたからでしょうが、同時に近代医学の目覚ましい進歩へのこいれでもありました。とくに目を見張らせるのは、外科学の進歩でした。サルトルによれば、ヨーロッパで長い間理髪師と同一視されていた外科医にとって、みずからのアイデンティティーが容認されるためには、大革命とナポレオン戦争が必要であったということです。(L'Idiot de la famille I, Gallimard, 1971)したがって、アシル＝クレオファスカ外科学によって社会的昇進をなしたことは、サルトルは「二重の意味」があったと言います。

加えて、前世紀以来の解剖熱というものも考慮に入れなければなりません。先駆的な数々の業績を残し、日本にも大きな影響をあたえた社会史学者フィリップ・アリエスは、このたび翻訳の出た大著、『死を前にした人間』(L'Homme devant la mort, Plon, 1977)の中でこの問題に多くのページをさいています。それによりますと、中世この方、埋葬は主として教会内の墓地になされていたのですが、墓地そのものが足りなくなつたうゑに、屍体の発する瘴気が大気と混じり合い、それが衛生学上よろしくないとする議論が何度もあったあげく、都市計画として大々的に墓地をつくるということになったそうです。そうした情況のもとで、屍体発掘が頻繁におこなわれ、その結果、屍体および死そのものに対する関心が、人々のメンタリティーの中にふくれあがってきたということなのです。死とは何か、死と生の境界についての問い直し、と言ってもいいでしょう。人間が死んだ後でも爪や頭髪は伸びるとか、絞首刑の直後に性器が穿挿するとかいったことが、種々報告されたようです。またネクロフィル、いわゆる屍姦ということも現実におこなわれ、妖しい魅力をもって人々を惹

きつけたということです。人々は「生きながら埋葬」(enterré vivant)されることを非常に恐れたといひます。フロベールの若い頃の作品のひとつに、『激怒と無力』(*Rage et Impuissance*)と題されたものがあり、死んだものと誤認されて埋葬された男(これも医者です)のむなしい、必死の脱出の努力とその絶望がテーマですが、この作品はこうした事情をコンテクストに置いて読まれるべきでしょう。

このような状況の中で、屍体解剖に対する興味と関心が、学者だけでなく一般の人々の間でも高まり、実際にメスを手にして屍体の解剖をおこなうアマチュアが増えてきたと、アリエスは報告しています。たとえば、ヴォルテールのような哲学者が、大事にされて居候をきめこんだ貴族の城館で、物理学の素人実験めいたことをやっていたのを私たちは知っていますが、これと同じように、貴族や裕福な市民たちが、自分の家の一室で屍体の解剖をやっていたというのです。これを目当てに墓場から屍体を盗掘して売りつける連中も出てきたらしく、こうした時代と人々の熱気が、解剖学や外科学を発展させる一助にもなったのだと思われまふ。

第三に、ギスターヴの父アシル＝クレオファスは、シャンパーニュ地方に深く根を降ろしていた一族のもとを去って、いわば新天地に一家を構えたということでありまふ。重要なのは、サルトルの言う、この「階級離脱者」がそこに形成したのは、典型的に家父長的な一家だったということです。このことはひとつの意味をもっていると言ふことができます。なぜなら、これはアリエスがまた別の書物(*L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*, Éditions du Seuil, 1973)で明らかにしていることですが、十八世紀の後半以来、伝統的な家族形態が崩れ始め、いわゆる核家族のような形が主流となってきたからです。家屋の様式からしてそのようになっていったと、アリエスは言ひまふ。アシル＝クレオファスは一見、ここで時代の流れに沿っているように見えますが、断固とした家父長制という点で、それは旧来の伝統を受けついでいるのです。おそらくそれは、彼が専制的な性格だったからでしょうが、同時に、代々農民に近い階層から成り上がったということも、大いに関係していると思われまふ。ともかく、大家族制が崩れるということは、夫婦を中心にした家族が形成されることを意味し、そこでは妻の役割が好むと好まざるにかかわらず大きくなっていくのですが、フロベールの父はこの点、時代の流れにきっぱりと背を向けていたように思ひまふ。

『ボヴァリー夫人』は、そうした時代のイデオロギーをバックにしています。たとえば、シャルルの母は、文学において初めてクローズ・アップされる教育ママではないでしょうか。ちょっとばかりハンサムな男にほだされ、結婚したものの、男は彼女の持参金を使い果たすと、若い女ばかり追いまわすようになります。そして彼女には、出来の悪い息子の尻を叩いて勉強させる以外、心の空虚を埋める何物もほかに残されてないのです。彼女は村の司祭に息子の勉強を見てもらひ(いまで言ひまふ家庭教師か塾でしょうか)、中学に入れ、必死で医学部に行かせる(と言っても、前に見た

ように免許医ですが)。卒業試験をパスしたときの喜びようは、冴えない父親の息子が東大に合格した現代の教育ママの歓声でしょうか。それだけではありません。息子が卒業するとき、彼女は何かをするのでしょうか？ 八方奔走して、ここなら間違いないという開業の場所を見つけてやるのです（まさしく息子の就職に立ち会う母親）。しかしながら、まさにそこでシャルルの哀れな運命は始まるのです。開業の場所がきまると、仕上げは結婚相手です。彼女は息子のために、四十五歳の、「ベッドの中では薪のように干乾びた」未亡人を、ただ金を持っているという理由だけで息子にあてがってやります。これは夫婦単位となって初めて、ブルジョワ社会に参入を許されるという当時の慣習と、金によって一家の礎をより強固にするという結婚の目標を念頭に置かねばなりません。彼女の嫁のエンマは、生まれた子供が女の子だと聞かされたときに、卒倒するでしょう。エンマには不倫の愛に身を燃やす以外、心のむなしさを補う手段はまったく何もないのです。

それもこれも、女性が形ばかり人生の主役にならされた時代の産物です。アシル＝クレオファスは、この点、断固として反時代をつらぬき通したとすることができるのです。

## 二

以上のことを前提としたうえで、作品に登場する四人の医師をどのように見るべきか、考えてみたいと思います。

まず、エンマが解毒自殺をはかり、地方の名医であるカニヴェ博士にも手のほどこしうがなくなつて、急遽、高名なラリヴィエール博士が呼び込まれます。この場面は、サルトルが鋭い洞察力をもって、そこに秘められた皮肉をあばくまで、フロベールが満腔の敬意をこめて父アシル＝クレオファスを語ったページとして、長い間読まれてきました。「もっとも明晰な批評家でさえ」、そこに息子によって語られる偉大な父の姿を見てきたと、サルトルは言っています。

たとえば、もっとも明晰な批評家のひとりであるアルベール・チボーデ — 彼の名著『フロベール論』は今日なお、寸毫も輝きを失っておりません — は、「医者の子であり弟であるフロベールは、医者を過当に滑稽化することはしなかった。父の姿を反映させたラリヴィエール博士は、『ボヴァリー夫人』の中で完全に尊敬の念をもって描かれたただひとりの人物である」(Gustave Flaubert, Gallimard, 1955)と述べています。

たしかに、ラリヴィエール博士は偉大な存在です。その登場はまるで神もかくやと思われるばかりです。「神の出現もこれほどの衝撃は与えまい。ボヴァリーはもろ手をあげ、カニヴェはびたりと不動の姿勢をとり、オメーは博士のご入来のはるか前からトルコ帽をぬいだ」(山田 爵訳)さらに、「博士の怒号のもと、病院中がふるえ

おののいた。弟子たちは博士を尊敬するあまりに・・・」「勲章も、肩書きも、学会もなんするものぞ、ただ手厚く寛大に慈悲深く貧者を施療し、美德を信ぜずしてしかもみずからは美德を実行する人物、この人こそは才気の鋭さによって鬼神のごとくおそれられることかなかったら、ほとんど聖者と目されもしたであろう・・・」「かくて博士は、偉大な才能の自覚と、そこばくの財産と、倦まずたゆまずいそんだ非難の余地なき四十年の生涯とが与える温容と威厳に満ちて日を送っていたのである」

たしかに、ここまでは幾つかの筆によって語りつかれ、私たちの知っている博士の肖像と重なり合います。そしてそこに、人々が畏怖と敬愛のこもった「美談」(サルトル)を見てとったのもうなずけます。しかしフロベールは、初期の近代国家が必要とするたぐいの美談を、得々として語るような、いわばおめでたい作家ではないでしょう。この一見讃辞めいた一節は、実は次に来る皮肉の前触れというか、むしろ隠れ簑であったように思えるのです。

以下、サルトルの主張を私なりに要約すれば、次のようになりましょうか。

(1) ラリヴィエール博士が出現する(あるいはフロベールが彼を登場させる)のは、すべてが終わったときである。博士はただエンマの死相を見に来るだけにすぎない。

(2) カニヴェの報告を聞いて、後で彼のとった処置をこっぴどく叱るのだが、もはや取り返しのつかぬことに対するこのような叱責は、たんに目上の者の目下の者に対する傲慢な権威の行使ではないのか。

(3) カニヴェの報告を聞いた後は、もうその場を抜け出すことしか念頭にないではないか。シャルルの懇請に、もはや手をつくすすべは何もないと宣言した後、次の一節が来る。「博士は御者に何か言いつけるためのようにして抜け出した。カニヴェ氏もこれにならった。カニヴェ氏もエンマの最後を見とるお役目は、御免こうむりたかったのだ」(Il sortit, comme pour donner un ordre au postillon, avec le sieur Canivet, qui ne se souciait pas non plus de voir Emma mourir entre ses mains.) ところで、ポミエール版のこの個所には、postillon の後に、mais pour s'en retourner à Rouen なる一句が挿入されている。してみると、もはや疑いの余地なく、ラリヴィエール博士は、一刻も早くその場を立ち去りたかったのだ。その間、十分もそこにいたでしょうか。シャルルの「お帰りになるのですか」という問いに、博士は「いや、あとでまた」と答えるのだが、これはシャルルのがわからのせい一杯の皮肉、博士のがわのぼつの悪い偽善とも読めるではないか。

(4) その直後、オメーの招待に応じて、博士は悠々と昼食をとる。その精神性の欠如は、まさしくフロベールの忌み嫌うブルジョワの姿そのものではないか。

と言ったところでしよう。ひとつつけ加えれば、カニヴェ氏の説明を聞きながら博士のもらす、C'est bien, c'est bien. という台詞は、人間の哀れな運命を超越し、一段と高みに立った神の視線がしからしめるものという、ガルニエ版、ゴット＝メルシュ女史の注解があります。そしてこれは、フロベールが初期作品のひとつ『マチュ



ラン博士の葬式』に描いた、父の像だということです。

サルトルのこの膨大な書物には生理的に共感を覚えられない人もいますが、そうした人々にとっても、この書物に展開される弁証法の幾つかは、真実の重みをもって迫って来ます。上記のことも、そうしたサルトルの功績のひとつと置いていいでしょう。大事なことは、明々白白たる父親賛美の言辞の背後に、そっと秘そかに、誰にもわからないように、非難と皮肉が隠されているということです。「もっとも明晰な批評家」をふくめて、百年以上も人々は違った読み方をしていたとすれば、そう読ませなかったフロベールの腕は、なかなかしたたかだと言わねばなりません。そしてこの「誰にもわからないように、そっと」というのが、フロベール流の皮肉の真髓であったように思えるのです。いまそのことを、他のふたりの医者についても見ていきたいと思います。

### 三

次はカニヴェ博士の場合です。この医師は作品の第二部第十一章、振れ足イポリットの手術の場面に登場します。この挿話は作品進行上きわめて重要な意味をもった事件であることを、まず言うておかねばなりません。季節は夏。前の年の十月にエンマとロドルフは決定的な関係にはいり、ふたりは愛人になっています。爛れたような肉体の関係に、その頃エンマは時にむなしさを感じ、人生において恋愛が最終的に頼るべきものであろうかと疑いを抱き、もっと強固な何物かに縋って生きたい気持ちにかられています。そして罪を悔い、神の前で愛を誓った夫のもとに帰りたいと、心から思うようになっているのです。

まさにその時をはかったように、イポリットの手術の話がオメーからもちこまれるのです。エンマはシャルルの成功を素直に願い、望む気持ちになっています。シャルルとしては男を上げる千載一遇の機会だというのに、このとき露呈されるのは、シャルルのどうしようもない愚劣と無能なのです。エンマはこの夫にわずかでも期待した自分が恨めしく、ふたたびロドルフの腕の中に身を投げていきます。ほかにどうすればよいと言うのでしょうか？ エンマはたんに不幸な女というだけでなく、不運な女(malchanceuse)だというチボーデの評言が、千金の重みをもって響く場面です。

オメーにおだてられ、妻からも励まされたシャルルは、自分の名前が世に喧伝されるチャンスとばかり、さながらでの悪い学生が試験勉強をするように、ねじり鉢巻きて猛勉強を始めます。このとき、彼は「ルーアンからヴァンサン・デュヴァル博士の著書を取り寄せ、毎晩頭を両手でかかえこんでの大勉強に取りかかった。」というさり気ない一節を、テキストの中に読むことができます。

ヴァンサン・デュヴァル博士とは何者でしょうか？

実は、六十年前の1931年に、ランベールという人がすでに指摘しており(Mercure

*de France*, 1<sup>er</sup> Juillet, 1931),その後ベル・レットル版のルネ・デュメニール博士の序論、さらにレオン・ポップの研究 (*Commentaire sur Madame Bovary*, Baconnière, 1951),ガルニエ版のゴット＝メルシュ女史の注などで言及されていることですが、ヴァンサン・デュヴァル博士とは「振れ足」*pie-d-bot*の手術に初めて成功した人で、その著書『振れ足手術論』(*Traité pratique du pie-d-bot*, Paris, Baillière, 1839)は、当時大きな反響を呼び起こした書物だということです。

私はこの書物を読んでおらず、ランベール氏の論文にも目を通していないので、デュメニール以下の人々の、いわゆる孫引きによって話を進めるわけですが、実はデュヴァル博士の著書の中に、フロベールの父アシル＝クレオファスの失敗談が出て来るというのです。それによりますと、マルタンという十七歳の女の子が振れ足の治療をアシル＝クレオファスから受けたのですが、その方法は鉄の副木をつけて、ただベッドに寝かせておくだけのものでした。ところが九カ月たっても、病状はまったく快方に向かう兆しがなく、娘の両親は業を煮やしてと言うのでしょうか、娘を退院させてしまいました。それからデュヴァル博士が呼ばれることになるのですが、彼はさっさと手術を施し、これを直してしまったのです。この手術の成功は、当時ルーアン近辺で、人々の話題をさらったということです。

ラルース百科辞典の十九世紀版によりますと、デュヴァル博士が最初に振れ足の手術をおこなったのは1835年とあります。当時のヨーロッパにはこの種の患者が多かったのだでしょう、「奇形の治療に新時代を画する貢献」をなしたと賞賛され、科学アカデミーからその年度の賞があたえられています。以来、多くの医師たちが患者を彼のもとに送り、そのほとんどすべてが完璧に治癒したそうで、デュヴァル博士の手術は230例に達したとあります。さらに、医師たちの多くは自分の成功例をすぐ公けにしたがるのに、デュヴァル博士は1839年になって初めて、著書を公刊したとのこと。

シャルルがこの書物を取り寄せて勉強したということは、ギユスターヴ自身もこれに目を通したということであります。事実、ガブリエル・ルルー女史の貴重な労作によりますと(*Madame Bovary, Ébauches et Fragmentaires inédits*, ①, ②, Conard, 1936),無能な医者が、デュヴァル博士のひそみにならおうとして失敗するケースについて、フロベール自身いろいろと「研究」している跡が、歴然とうかがえます。要するにフロベールは、デュヴァル博士の書物によって、父が振れ足の治療に失敗したことを知っていたわけです。となると、父は手術に失敗したのではなく手術を頭から無視したのに、作品の中でシャルルは、イポリットの手術をじっさいにおこなってこれに惨めに失敗するという違いはありますが、振れ足の治療に失敗したという点では、両者は重なり合うのではないのでしょうか。ここで見逃すことができないと思われるのは、先に述べたように、この事件のもつ重要な意味でしょう。もう一度繰り返せば、エンマが安息の場をもとめて、心から夫のもとに

帰りたいと思い、妻として初めて夫の成功を願っているまさにそのとき、そんな彼女の気持ちを嘲るかのように、運命の皮肉はシャルルの不様な失態を仕組むのです。シャルルの一世一代の腕の見せどころというべきシチュエーションに、なぜわざわざフロベールは、よりによって振れ足の手術というケースを取りあげたのでしょうか。私はそこに、作者のある秘やかな意図を感じないわけにはいかないのです。

ついでに言うておきますと、デュヴァル博士は、アキレス腱を切開することで振れ足の手術に成功するのですが、この手術には痛みはほとんどなく、せいぜい虫に刺されたような感覚を伴うだけで、三秒か五秒で終わってしまうということですが、作品の中のシャルルの手術も、あっけないほど簡単にすんでしまいます。「シャルルが皮膚を突いた。はじけるような音がした。すでに腱は切断され、手術は完了したのである。イポリットはあまりのあっけなさに呆然として、かがみこんでボヴァリーの手にやたらと接吻した」。シャルルの失敗は手術そのものではなく、その後の処置のまずさから患者の足が壞疽を起こしてしまうのです。

ここで微妙なのは、壞疽がどうしようもなくなってから呼ばれる、カニヴェ博士の存在です。カニヴェ先生は医学博士で、ヌーシャテルの有名な開業医、パリの先端的な医療技術をくだらん流行とこきおろし、自分は昔ながらの、腕のいい「お医者さん」であることを得意げに吹聴します。ところがその長口説は、パリの学会から取り残され、田舎医者として生きざるを得ない自分の境遇を、無理して、かたくなに正当化する、言いかえれば、裏返しの恨み節のようにも聞こえるのです。このような自己辯解をおこなう人間は少なくありません。

「ありあまたぞろパリの新発明というやつじゃ！ いかにも都の連中の思いつきそうな小細工じゃ！ 斜視矯正術だの、クロロフォルムだの、膀胱碎石術だのの同類、いや、すべからく政府が十把ひとからげにして禁止すべき、いんちき療法のはしくれじゃ！ そんなものに飛びつくやからにかぎって、小利口ぶりおってからに、やみくもに薬ばかりつめこんだあげくの後始末もできん。わしらはそんなはったりはごめんじゃ。わしらは学者ではない、見てくれがしの文化人気取りとはちがうぞ。わしらは開業医じゃ。昔ながらの『お医者さん』じゃ。丈夫でびんびんしている男をつかまえて手術などとは思もよらぬこと！ 振れ足をなおす！ 振れ足かなおせるものかい。その伝で行った日にゃ、僂儂の背中でもまっすぐになるとよ！」

相手が免許医と見れば、頭から馬鹿にしてかかるこの先生が、たとえばラヴィエール博士のような真の名声を前にしたとき、いかに直立不動の姿勢をとるかは、作品の終わりで見事に描き出されます。

カニヴェ先生が微妙だと言うのは、ここで極度に滑稽化されている昔ながらの「お医者さん」の辯解が、実はパリの軽佻浮薄を殊更のように唾棄して、みずから大物の田舎医師としての道を歩んだ、あるいは歩まざるを得なかったアシル＝クレオファスの場合と重なるように思えるからであります。おそらく、カニヴェ先生の長口説は、

息子によって秘そかに垣間見られた父の本心の戯画なのかもしれません。アシル＝クレオファスもまた、振れ足の女の子を、鉄の副え木をはめておくだけで、何か月も断固として手術などしようとしませんでした。「振れ足かなおせるものかい」という彼の心の声が、聞こえてくるような気がします。

若い頃のアシル＝クレオファスの猛勉強と才能は音に聞こえています。パリ医学界の重鎮となった碩学デュビュイトランが、自分と七歳しか違わぬこの弟子の才能を妬んで地方に追いやったと、主張する研究者もいます。真偽のほどは誰にもわかりません。ただ、アシル＝クレオファスが医師としてどのくらい評価されているかは、客観的に見ることができます。現代の辞書類には、彼はもはや作家フロベールの父であるとしか言及されていません。十九世紀のものを調べても、彼の取り扱い、たとえばヴァンサン・デュヴァル博士などより遥かに少なく、せいぜいその五分の一程度にすぎません。これはおそらく、首都の医学界の中で学者として活躍したひとと、いかに名望が高かろうと、地方の医者として一生を送った人間の違いでしょうか。

この作品のクロノロジーは曖昧をきわめています。私の計算によりますと、シャルルの振れ足手術の失敗、つまりカニヴェ博士が登場するのは1842年のことかと思われれます。このとき彼は、「医学博士で年齢は五十歳」(âge de cinquante ans)と紹介されます。この作品には多くの人物が登場しますが、そのうち年齢をあたえられるのは以下の人物に限られているのです。シャルル、冒頭で十五歳くらい(I-1)。シャルルの父、田舎に引退するとき四十五歳、死ぬとき五十八歳(II-2)。最初の妻エロイズ四十五歳(I-1)。ルオー爺さん五十歳(I-2)。レオン二十歳(II-3)。ロドルフ三十四歳(II-3)。カニヴェ博士五十歳(II-11)。その他の端役のうち、フェリシテ十四歳(I-9)。オマー夫人三十歳(II-3)。ダンデルヴィリエ公爵夫人四十歳くらい(I-8)。ルールーン店で働く女の子十三歳くらい(III-6)と、ごく少数なのです。

女主人公のエンマはもちろん、オマーもブルニジアンもラリヴィエール博士も年齢不詳なのです。それに、これは後で若干述べることになると思いますが、新たに人物が登場する場合、フロベールはじかに年齢を述べるケースはむしろ少ないのです。その理由は、彼の文学観と方法にも関わっているのでありまして、彼の世界では人物は往々にして他の人物によって見られ、これを見ている人間の目を通して描写されることが多いのは周知のことだと思いますが、初めて目にする人物は、その正確な年齢がすぐにわからないのがふつうだからであります。

そう考えていきますと、ここで「カニヴェ博士、五十歳」という最初からの断定はむしろ異例だと言えます。前に申しましたように、デュヴァル博士の最初の手術は1835年、その著書の刊行は1839年であります。アシル＝クレオファスが振れ足の女の子の治療をしたのは、何年のことか私にはわかっていませんが(デュヴァル博士の著書には書いてあるかもしれません)、いずれにしてもこの四年間のことでしょう。彼は1784

年（11月14日）生まれですから、もしそれが1835年くらいだとすると、カニヴェ博士の年齢とほぼ一致するわけです。

ともかく、ここでもまったく誰にもわからないようにですが、そっと、それとなく父アシル＝クレオファスと符牒が合うように思えてなりません。

#### 四

医者としての地位の順に申しますと、次は作品の主人公である、免許医シャルル・ボヴァリーになります。医者の息子であり弟であるフロベールが、初めて発表する作品の主人公に医者を選び、これをどのような人物にしたてたかについては、いまさら申し述べる必要はないでしょう。

#### 五

以上の三人は誰でも思い浮かぶのですが、この作品には前に申しましたように、もうひとり医者が登場します。もぐりて医者めいたことをやっていたオメーではありません。それは主人公シャルル・ボヴァリーの父親です。シャルル＝ドニ＝バルトロメ・ボヴァリー、「元軍医補」（ancien aide-chirurgien-major）と紹介されます。すなわち、ナポレオンの軍隊が多く必要とした軍医の中でも、ほんのちっぽけな存在です。大革命とナポレオン戦争が外科医の地位を結果的に引き上げ、ナポレオン自身も外科医の養成に意を用いたこと、そしてフロベールの父、アシル＝クレオファスがその恩典に浴したことは前に述べました。

テキストには続けて、「この男は1812年頃、徴兵関係の事件に連座して免職処分になると、生来の美貌にものをいわせて、彼の風采に惚れ込んださる編物商の娘といっしょに六万フランの持参金を軽く手に入れた」とあるのですが、この文章は、クロノロジ的にはいささか曖昧だと言えましょう。つまり、軍隊を免職になり、さる編物商の娘と結婚したというのですが、そのふたつの事件の年代・日付については、正確に言及されていないのです。どちらも「1812年頃」と、わざわざ曖昧にくくられています。そして、息子であるシャルルの出生年も述べられてはおりません。言うことは、彼は何歳でエンマと結婚したのか、またエンマが服毒して死ぬとき、あるいは彼自身が死ぬとき、はたして彼は何歳なのか、正確に算定することが不可能になるわけです。

フロベールが曖昧さをよそおう、あるいは隠れ蓑にする理由は、作品の論理から推定することができます。ご承知のように、『ボヴァリー夫人』は、ついに作品の中に姿を見せることのない「僕ら」（nous）の語りによって、ページが開かれます。ある日、自習室で勉強している「僕ら」の前に、校長先生が「新入生」を連れて来て紹

介し、この「新入生」のどうしようもない、生真面目さと実直さが、クラスの爆笑を引き起こすさまが、まず冒頭で語られます。そこに哀れなシャルルの一生が予感として漂っていることは、ここで言うまでもないでしょう。「新入生」の一日が語られた後、彼の生い立ちから、彼がルーアンのその中学に、ほかの子供より二年遅れて入学させられるまでの、いわば作品の前史に移っていくのですが、これを語っているのはいったい誰でしょうか。「僕ら」の中に含まれる「僕」が、自分の記憶に頼って語り続けているようにも思えますが、あまりにも家庭の細部に立ち入っていることでもあり、やはりこれは中性の人間、つまり作者の語りと見るべきでしょう。問題の「1812年頃・・・」という記述は、シャルルの中学での一日から、彼の生い立ちへと移る転換点の文章なのです。したがって、そこではまだ「僕ら」の中のひとりの、記憶の不確かさのようなものをとどめているようにも思えます。冒頭「新入生」は「十五歳くらい」と書かれています。これは初めて見る「僕ら」には、自分たちより年上に見えるが（皆は十三歳）、じっさいの年齢は断定できないので、曖昧な記述にならざるを得ません。これはフロベール流のリアリズムなのです。

しかし、この「1812年頃」は、どうもそれだけではないように思えるのです。ちなみに、この作品で年代が記されるのは二箇所しかありません。もうひとつは「1835年」までは、ヨンヴィルに馬車道が通じていなかったという記述です（II-1）。ついでに言うと、明確な日付の指示も、エンマとロドルフの駆け落ちの予定日が「9月4日、月曜」とされる以外、ほかにはないのです。『感情教育』では「1840年の9月15日、早朝（6時頃）、大学入学資格試験に合格した青年が、パリのサン＝ベルナル河岸から船に乗って故郷に向かう場面に始まり、「1867年3月の終わり、夕暮れどき」、アルヌー夫人の最後の訪問がおこなわれます。つまりここでは、小説の発端と最後の時間的枠組は明示されているのですが、『ボヴァリー夫人』では、プロローグとエピローグには含まれた主要部分の開幕と終末をしめす年代の指標はなく、いっさいは模糊としているのです。もっとも、『感情教育』においても、年代が明確にしめされるのは、このほかにもう一度あるきりで、時間的不透明という点は同じですが、ここでは歴史的事実についての言及が数多くおこなわれ、これによって私たちには、作品の場面がいつのことなのかを知る手掛りが得られます。ところが『ボヴァリー夫人』では、歴史的事実についても、第二部冒頭でオマーの口から、ポーランド難民とリヨンの水害についての言及があるだけで、これによって作品のクロノロジーをおしはかるというわけにはいかないのです。

こう見てくると、「1812年頃」という指示は、実はきわめて重要な意味をもっているのです。唯一つこの年代だけが、作品のクロノロジーを決定する根拠になるのです。『ボヴァリー夫人』という作品は、これによって推定したシャルルの出生年を基点として、季節、月、週、祝日などを追ひ、寒暖、植物、虫、衣服等を勘案しながらクロノロジーを決定していく以外に、方法はないのです。『ボヴァリー夫人』のクロノロ

ジー、及び、そこに数多くの不整合、不透明、不確実、さらに矛盾すら存在することについては、すでにE・ボヴェ、ファイ及びコールマン、S・バック、R・デシャルム、R・デュメニール、L・ポップ等の研究があり、さらに近年では、R・ビスミュー、J・セバッシュ、S・イエシュウア、C・ゴット＝メルシュといった人々によって、新しい視点が提出されています。日本語では、数年前に、諸説を整理しつつ、クロノロジーだけでなく、この作品の時間性全般について私の考えをまとめておきました。興味のある方はご覧になってください。

では、なぜフロベールは作品の基点となる年代に、「1812年頃」という数字をもち出してきたのでしょうか？ それはアット・ランダムな数字なのでしょう？

私がかこれまでお話ししてきたようなコンテクストからすると、それは決して偶然だとは思えないのです。1812年というのは、実は、ギュスターヴの両親が結婚した年なのであります（1812年2月10日）。ここからも、「家族の物語」の様相が浮かび上がってくるではありませんか。そして、フロベールが一見、作品のロジックの要請に隠れたようなふりをして、「頃」という前置詞を挿入した意図も読み取れなくもありません。これまで述べてきた「そっと、誰にもわからないように」というやり方です。シャルルの両親を、こっそり自分の両親に重ね合わせているのではないのでしょうか。

「1812年頃」という数字が、作品のクロノロジーの基点になり得るのは、これによってシャルルの出生年が算定し得る、あるいはこれによらざるを得ないからであります。シャルルの出生年を断定し得るいかなる根拠も、テキスト自体には存在しません。最初にこの作品のクロノロジーを作成したのはエミール・ボヴェでしたが（*Le réalisme de Flaubert*, in RHLF, 1911）、彼はこのことを認めつつこれを一応1812年とし、デュメニール、ポップもその説を踏襲しています。これに対して、近年のビスミューやセバッシュは1813年説をうち出しています。それはこの年、1813年2月9日が、ギュスターヴの兄アシルが誕生した年であるという理由からです。

1812年か、1813年か。それ以後という可能性もないわけではありません。しかしその場合も、1815年以降ということはあり得ないのです。作品の末尾で、エンマの死後、オメーは国王に嘆願書を提出し、その中で国王を「われらのよき父」と呼び、アンリー四世になぞらえているのですが、私のクロノロジーによると、これは1845年末か1846年の初めのことであり、周知のように、1848年の二月革命によってフランスの王政は打倒され、国王は存在しなくなるからであります。したがって、作品のクロノロジーが三年のびる、つまりシャルルの出生年が1815年以降になることはないと考えられます。

ただひとつ、これまで研究者たちによって指摘された例を私はまだ知らないのですが、実は、シャルルの誕生日が冬であることは、作品の中で明らかにされているのです。第二部四章に、シャルルはレオンから誕生祝いとして、「見事な骨相学用の髑髏をもらった」とあります。その正確な日付、あるいは月さえも特定できません。だが

その章の書き出しは「季節が寒さに向かうと・・・」(Des les premiers froids・  
・)であり、次の五章の書き出しは「それは二月のある日曜日のことだった。雪が  
降っていた。」(Ce fut un dimanche de février qu'il neigeait.)となっている  
のです。してみると、シャルルの誕生日は、このふたつの語句の間でなければなりま  
せん。ノルマンディで、季節が寒さに向かう頃というのは、十一月の中旬でしょうか、  
月末でしょうか。ともかく、十一月か十二月から、翌年二月のある日曜日までの間と  
いうことになります。内容からすると、誕生日祝いのプレゼントをもらってから章の終  
わりまでは、若干の日数が経過しているように思えます。「ある日曜日」をかりに月  
末と仮定しますと、シャルルの誕生日は二月の初旬くらいまででしょうか。前年とい  
う可能性もあることはもちろんです。しかしながら、やはり二月九日、つまり兄アシル  
の誕生日がフロベールの脳裏にあったと考えるのが、自然ではないでしょうか。

これまで申しのべてきたもろもろの事柄からおして、シャルルの出生年は兄アシル  
のそれと重なり合う1813年、そしてその誕生日すら、兄のそれに合わせた日付をフロ  
ベールは念頭に置いていたのではないかと、私は考えるわけです。

シャルルの父、シャルル＝ドニ＝バルトロメ・ボヴァリーは下っ端の軍医です。そ  
れも不祥事を起こして軍隊を誡になるような。この男の医者としての役割は作品の中  
では皆無です。ただ息子のシャルルは、一段格下の免許医とは言え、一応医者として  
一家をなします。これもまた、一族の出世の物語でしょう。つけ加えておけば、シャ  
ルルの父の死は五八歳とされています。それは1842年か43年と考えられます。とす  
ると、彼の誕生日は1784年ないし5年となり、1784年生まれのアシル＝クレオファスと重  
なるのです。

フロベールの兄アシルは、ご承知のように、一家の中でぐうたら息子だったギユ  
スターヴとは逆に、小さい頃から父の学統を継ぐべく、まっしぐらに医学の道に進んだ  
人物です。となると、どうでしょうか。「医者の子であり弟であるフロベールは、  
医者を過当に滑稽化することはしなかった」と言う、先のチボーテの評言とはまったく  
逆に、ここでは四人の医者それぞれが父と兄を土台にしていると言いますか、なん  
らかの意味で、フロベールの念頭にあったと言えるのではないのでしょうか。炯眼なチ  
ボーテですら見抜けなかったのですから、まことに、誰にもわからないようにと言  
うほかありません。しかしまたチボーテは、フロベールの文体を論じた浩瀚な章におい  
て、彼の文章の中にある、並みの教養をもったフランス人であればとうてい考えられ  
ないような、幾つか誤謬や不正確の例をあげて、「彼の文章の不正確さの欠点を少し  
でも弁護し、その有効な面を強調しようとしても、所詮それはむなしいかもしれない  
・・・彼には、少々先天的な言語上の欠陥があったことは認めざるを得ないのである」  
と言いながら、彼一流の論理転換によって、「人々がまるで告発状かにかのように  
目録をふりがざして責めたてる、二、三百の誤謬は、この目録のうえで見たときに気  
になるだけである。作品として読むときには、文章の動きがこれを押し流してしまい、



これにほとんど気づくことはないのだ・・・フロベールの文章が悪文だとする人々は、まことにむなしい騒ぎをしているものだ」と述べています。そしてこのことは、フロベールのあらゆるレベルにおいて言えるのではないかと、私は思うのです。

最後に、「家族の物語」とは、幼い頃のトローマチスムが皮肉、風刺、もう少しどぎつく言えば復讐という形で発現されたものだけに限りません。四人の医師の場合には、その面が強く出ていることは事実です。しかし、エンマもまたある意味で、「家族の物語」のコンテキストにおいてみることも可能なのです。前にも言いましたように、フロベールの女主人公は年齢をもちません。アルヌー夫人に至っては、過去さえ存在しないのです。エンマの年齢を知る手がかりは皆無です。ただ、当時の上・中流のブルジョワジーの子女の結婚適齢期が十八歳であったこと、そして当時、多くの小説において娘が十八歳で結婚していることからして、エンマの結婚もこれにあてはめると、彼女の死は、ギュスターヴの妹カロリーヌの死とほぼ年代的に、三月という月まで重なり合うのです。日まで同じと断定する研究者もいます。そして妻を失ったシャルルの悲しみに、フロベールが心から愛していた妹を失った自分の悲しみをオーバー・ラップさせていること、これは証明できると思うのです。

ご静聴ありがとうございました。

(本文は7月13日、広島大学フランス文学研究会において依頼された講演に加筆し、言い足りなかった点を補ったものである)